

地方におけるガ行鼻音意識：関西と九州における大学生アンケート調査より

陣内，正敬
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/4291>

出版情報：言語文化論究. 3, pp.77-84, 1992-01-31. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

地方におけるガ行鼻音意識

—関西と九州における大学生アンケート調査より—

陣内正敬

1. はじめに

日本語におけるガ行鼻音（以下、カ°）については、国立国語研究所（1966）によりその全国的な分布の様相が知られていたが、そこでカ°地域とされているところでも、ガ行濁音（以下、ガ）に取って代わられているという現象が特に首都圏を中心にした最近の調査研究により報告され、その要因についても言語内的、外的ないくつかのものが論じられている（加藤1983など）。これら様々の報告を総合すれば、この変化は主に世代差という形で現れており、その上に都市部対周辺部という意味での地域差も見られるようである。

一方水谷（1987）では、名古屋のように元来カ°のなかった地方で逆に若年層の間にカ°が臨時的に聞かれるという報告がされている。筆者の住む九州も非カ°地域であるが、時としてカ°を聞くことがある。これも首尾一貫したものではなく、時と場合に応じて出現する自由変異である。しかしながらこの現象は全くランダムに見られるのではなく、ある程度の予測がつけられそうである。即ち言語内的には、語中のカ°（鏡、影などのカ°）より、助詞「が」のカ°の方がはるかに多いようであるし、言語外的には、少なくとも九州では、改まった場面で、男性より女性の方に多い。前者については、単語の中に組み込まれたカ°はひとつひとつ辞書形として覚えなければならないという困難なものであるのに対し、助詞の「が」はこれひとつについて常

にカ°を用いればいいし、かつ文節の切れ目としてよく耳立つことがあり、また出現頻度も高いという点で置き換えられやすいのだと思われる。後者については、フォーマルな場面での正式な発音としてカ°を意識している話者があり、特に女性にその傾向が強いと予想されるのである。いずれにしろこのようなカ°の出現に対する予想は予想であり、信頼の置ける社会言語学的調査がなされなければ確かなことは言えない。

さて非カ°地域で自由変異として併存していると思われるカ°とガには、どのようなイメージ（文体的意味）が付与されているのであろうか。カ°とガのイメージについては、NHK（1980）に全国的規模の調査があるが、これは、聞いた感じはどちらが良いかという単一の質問であり、結果は、カ°地域はカ°を好み、ガ地域はガを好むということになっており、これは言い換えれば自分になじみのある方を好むという大方の予想通りの回答であった。

小論はいくつかの観点から選ばれた複数の評価項目を設定し、それによってカ°、ガ音のイメージを幾分詳しく調べようとしたささやかな調査の報告である。

2. 関西、九州若年層のガ行鼻音意識

前節の主旨に基づき、地方におけるガ行鼻音意識を探るため、関西と九州において1990年12月次のような同様のアンケート調査を実施した。

2.1. 調査の概要

16の評価項目(2.2に後述)と回答者の属性を知るための欄を設けた調査票(付録参照)を用意し、これを関西の大学(東大阪市)に通う関西方言圏出身の学生50名と九州の大学(福岡市,北九州市)に通う九州出身の学生50名を対象に調査を行なった。なお男女の割合は両地区とも同数の25名ずつである。

まず調査者*が、アンケート用紙を配布後、若干の回答方法を解説した。これは調査票が調査者の事前の解説を想定して作られており、特に「それがいい」や「けが」などの下線部分について[ga]と[ŋa]両様の発音を調査者が示すという重要なものが含まれていた。このような調査では、本来ならばテープに収録された同一人物の音声によるマッチトガイズ(matched-guise)法によるべきであったが、調査者が両人とも以前からガ行鼻音の調査研究を手掛けており、この種の調査には熟知していたことと、双方緊密な連絡が取れるという状況のもとであったので、このような簡便な方法でも信頼の置けるデータが得られると考えたからである。

2.2 調査項目

付録に挙げたように、調査票には16の評価語が含まれている。評価語の選定については次のようなステップを踏んだ。まず予備的調査として、九州出身の大学生にカ°のイメージを思いつくままに挙げてもらった。この中には調査票に取り挙げた評価語以外にも「ぼんやりしている」「鼻づまりの感じ」「美しい響き」などプラス評価、マイナス評価入り混じった様々のイメージが出された。これらをいくつかの評価語にまとめたが、その際井上(1977)の方言イメージの評価語も参考にした。取り挙げた16の評価語は〈感覚評価〉、〈感情評価〉、〈知的評価〉の名のもとに3種類に分類される。

(1) 〈感覚評価〉: カ°, ガの聴覚イメージを、

視覚、触角などの他の感覚イメージで表現したもの。(柔かい/硬い),(丸い/四角い),(長い/短かい),(曖昧/明瞭),(綺麗/汚ない)などが含まれる。

(2) 〈感情評価〉: カ°, ガの聴覚イメージを感情語に移し変えたもの。(優しい/厳しい),(上品/下品),(丁寧/粗野),(女らしい/男らしい),(深みがある/深みがない),(味がある/味がない),(使用したい/使用したくない),(好き/嫌い)などが含まれる。

(3) 〈知的評価〉: 前2者が主観的な評価であるのに対しこれはどちらかと言えば客観的な評価が出る項目である。(教養がある/教養がない),(正しい/誤り),(共通語的/方言的)などが含まれる。このような大まかな分類基準はあるものの評価語の選定に厳しいチェックをしたわけでもないし、大した客観性も備えていないわけで、実際に調査後につけ加えれば良かったと思われる評価項目も出て来た次第であるが、カ°, ガの持つ大よそのイメージはカバーできるものと思われる。

なお、回答方法は5段階尺度のSD法(意味微分法:Osgood(1957))を取った。

この他、カ°に気づいた時期や、現在カ°とガの識別ができるかどうかも参考として問うている。

2.3 調査結果並びに考察

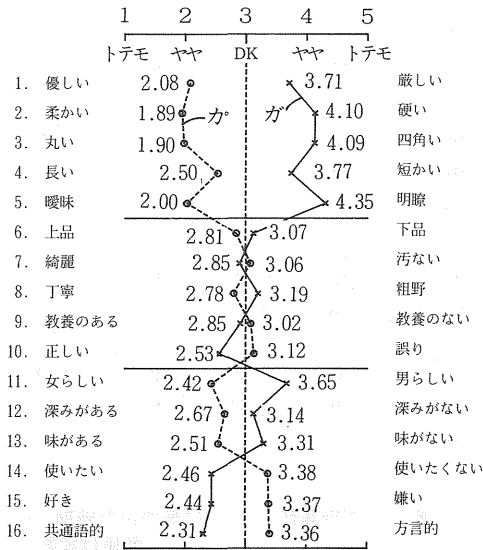
全体を通じて、関西と九州で相反するような傾向は見られず、程度の差こそあれ似たような評価となった。そこでまず両地区を通じての全体像を明らかにし、次に地区別ないし、男女別に差異の大きいものを比較対照することにする。

2.3.1 ガ行鼻音、ガ行濁音の平均像

16の評価語についての両地区平均したものが図1である。なお評価語の順序は調査票通りで、ランダムに並べてあり、前節で論じた分類順にはなっていない。

図1 ガ行鼻音(カ^o)とガ行濁音(ガ)に対するイメージ(関西,九州の大学生100名。地域、性の割合は同数)

各評価点に付した数値は、5段階SD法でグラフの上端につけた数値を与えた場合の平均値である。



以下この図から見て取れる傾向を主としてカ^oに注目しながら箇条書きにして記す。

- (1) カ^oとガの間で出た差の大きいものから上位5位までを並べると、(曖昧/明瞭)、(柔らかい/硬い)、(丸い/四角い)、(優しい/厳しい)、(長い/短い)であり、(優しい/厳しい)を除いては前節で述べた〈感覚評価〉に当たる。これは、破裂音系列の鼻音と口音が持つ調音上の特徴が聴覚イメージとしてそのまま対比的に現れた感じがする。一方〈感情評価〉は一般に差が少ないが、その中でも(優しい/厳しい)は群を抜いて明瞭である。これも前4者の感覚評価と軌を一にするものであり、相関係数を見てもこれら5つは非常に密接な関わりを持っていることがわかる。(カ^o、ガ両方について有意水準0.1%ないし1.0%で相関ありと出ている。
- (2) 〈感情評価〉において興味ある相違が出

たのは(女らしい/男らしい)に関してである。(2.42/3.65)という数値に対して、平均値の差の検定は行っていないが、かなり明瞭な差と言わざるを得ない。ただ、この評価語は女性、男性が一般に持っていると言われる「らしさ」を考へてみるならば、カ^o、ガのイメージ差の上位に挙げられた評価語がそのまま当てはまる感じもあり、ある程度は期待されることでもある。相関係数を見ても5%有意水準ではあるが、(優しい/厳しい)、(柔らかい/硬い)、(曖昧/明瞭)と相関ありと出た。この他カ^oの評価については、(上品/下品)、(綺麗/汚ない)、(丁寧/粗野)の3者が強い相関を見せ、これと(女らしい/男らしい)が関わっていることがわかった。

(3) 〈知的評価〉の中で予想に反した回答となったのが(共通語的/方言的)に関する評価である。これについては、九州の女性が他とは異なりカ^oに対し共通語的という反応をしている(後述)が、平均すれば予想されたカ^o=共通語的、ガ=方言的という図式と正反対の結果となった。アナウンサーの養成、日本語教師の養成などでは正しい発音とされ、今でも標準語音意識、規範意識のあると思われたカ^oも、関西、九州の若年層にとっては、特に意識する機会でもなければ何か普通とは違った音声くらいにしか聞こえてないようである。東京でもカ^oの衰退傾向に関する調査報告がこれまでいくつかあるが(永田(1987)、日比谷(1990)など)これと同様に、あるいはもっと速いスピードで関西方言圏においてもカ^oが聞かれなくなっているようであり、特に若年層においては、統計的な報告はないようであるが、ほとんど消滅している旨の記述が多い(飯豊他(1982)など)。日本言語地図(国立国語研究所1966)のカ^o音の分布域と比較すると驚くほどの差異ということになるが、それだけ急速に失なわれつつあるということであろう。むしろアンケートのコメント欄に見られたことであるが、「東北弁

表1. ガ行鼻音(カ^o)に対する評価(数値は図1と同様)

評価項目	関		西		九 州			全 体
	全 体	女	男	全 体	女	男		
1. 優しい / 厳しい	2.24	2.20	2.28	1.92	2.04	1.80	2.08	
2. 柔らかい / 硬い	2.02	2.00	2.04	1.76	1.84	1.68	1.89	
3. 丸い / 四角い	2.04	2.08	2.00	1.76	1.84	1.68	1.90	
4. 長い / 短い	2.68	2.76	2.60	2.32	2.40	2.24	2.50	
5. 曖昧 / 明瞭	2.02	2.04	2.00	1.98	2.08	1.88	2.00	
6. 上品 / 下品	3.04	2.92	3.16	2.58	2.44	2.72	2.81	
7. 綺麗 / 汚ない	3.18	3.28	3.08	2.94	2.92	2.96	3.06	
8. 丁寧 / 粗野	3.08	3.08	3.08	2.48	2.40	2.56	2.78	
9. 教養のある / 教養のない	3.22	3.16	3.28	2.82	2.72	2.92	3.02	
10. 正しい / 誤り	3.20	3.12	3.28	3.04	2.80	3.28	3.12	
11. 女らしい / 男らしい	2.54	2.64	2.44	2.30	2.12	2.48	2.42	
12. 深みのある / 深みがない	2.76	2.72	2.80	2.58	2.64	2.52	2.67	
13. 味のある / 味がない	2.58	2.60	2.56	2.44	2.56	2.32	2.51	
14. 使いたい / 使いたくない	3.36	3.52	3.20	3.40	3.32	3.48	3.38	
15. 好き / 嫌い	3.28	3.48	3.08	3.46	3.52	3.40	3.37	
16. 共通語的 / 方言的	3.60	3.72	3.48	3.12	2.52	3.72	3.36	

を連想させる「ひなびた感じ」「田舎的」という方言と結びつく印象が強い。九州は離島を除いて従来からカ^oは聞かれず、やはり特に意識する機会がない場合には、関西と同じようなことが言えるようである。なお(共通語的/方言的)は(正しい/誤り)、(教養のある/教養がない)と相関があり、特に前者との結びつきが強いという結果が出た。

2.3.2 地域別、男女別の比較

表1は16の評価語に対するカ^oについての地域別、男女別の平均値を示したものである(数値の意味については図1の解説を参照)。なおガに関しては検討すべき相違は見当たらなかったため省略する。

両地区間の差にどれくらいの有意差が見られるかは、詳細な検討が必要であるが、一般的傾向として、九州の方が関西よりも数値が全体的に低く各評価の程度が強い。これはひとつには前述のように九州ではテレビ、ラジオなどで間接的に聞くことはあっても直接に

表2. ガ行鼻音(カ^o)に気づいた時期(数値は実数)

地域・性	時期					計
	小学校	中学校	高校	大学		
関西	女	5	2	3	15	25
	男	1	4	0	20	25
小計		6	6	3	35	50
九州	女	5	5	4	11	25
	男	0	3	5	17	25
小計		5	8	9	28	50
計		11	14	12	63	100

カ^oを聞くことはまずないと言ってよく、その分この音に対し過剰に反応したということが考えられる。ふたつには九州女性に顕著に見られる(上品さ)、(女らしさ)、(教養のある)、(共通語的)などにおける評価が、数値を低めるのに大きく寄与している。九州の若年女性にとってはカ^oは〈感情評価〉面で(女らしさ)、(上品)、(丁寧)といった印象を与えるのみならず、〈知的評価〉面でも(共通語

的)、(正しい)、(教養のある)という点でプラスイメージの高い特異な反応をしたということが言える。この結果は、1.で述べたカ°の使用者、使用場面と符合する。

この理由としては、いつ頃カ°を知ったかということ、これを意識化するきっかけとなっている教育的背景が考えられなければならない。表2は、‘カ°の存在を意識したのはいつ頃ですか’という質問に対する回答を、地域別、男女別に集計したものである。なお気づいた時期は、小学校、中学校、高校に整理し、また「これまで気づかなかった」という回答には‘大学’を当てた。

両地区とも女性の方が早く気づいているし、特に九州女性は過半数が高校までに意識化している。意識に昇るきっかけとしては、「音楽の時間に歌を歌う時」、「合唱サークルで」、「国語の音読の時」、「放送部に入って」などが主なものであり、いずれもカ°の方が「良い」ないし「正しい」という指導がなされている様である。中には英語の授業で [ŋ] を知ることにより、逆にカ°を意識するようになったというコメントも数人に見かけられた。いずれにしる「正しい」「良い」などの価値観には男性より女性の方が敏感な様であり(英語圏においてもこの種の知見が Trudgill (1974) などに報告されている)、たとえ同じように教育されても女性の方がより良く記憶に留め易いことがあるのではないかと思われる。九州の女性に関してはマスメディアを通してしか接するチャンスがないためか学校での授業が効果的に現われているようである。一方関西では周辺のガ行鼻地域から流入してくる話者を通して直接に接する機会があるようである。例えば、京都で大学時代を過した富山市出身の女性にインタビューした際、田

舎風の発音と取られた旨の報告があった。従って彼女自身の意識としてもガの方を共通語的と感じている様であった。おそらく従来は関西方言圏にカ°があったが今は古い感じのものになっているということ、カ°を残す周辺地方からの話者がいるということが、九州の女性の場合とはかなり相違した結果を出した要因であろうと思われる。

3. おわりに

調査方法にしる、インフォーマントの数にしる、予備調査程度の非常にささやかなガ行鼻音意識調査であった。今や、首都圏でも衰退しつつあると言われるカ°は、今地方でどのように意識されており、これからどのようになってゆくかを探る最初のステップを作ることが本調査の目的であった。カ°の将来についてはカ°の持つ規範意識が、その地方でどれくらい強いかが重要な鍵となるであろうが、この場合には、ある特定の職業ないし特定のスタイルでのみ残り、地域的分布という面では、消滅することも考えられる。

この種の言語変化は言語意識を抜きにしては語れない。今後調査方法を充実させ、調査地域も (a) 従来からカ°のなかった地域 (九州、中国、愛知、新潟など) (b) 以前あったが現在消失しつつある地域 (関西、東京など) など (c) 現在でもカ°が優勢な地域 (北関東、東北、北海道など) などに分けて調査を行なう必要があるだろう。言語の変異、変化のメカニズムを探るという理論的な面でも、また音声面での国語教育、日本語教育という応用的な面についても、それらを考える上でひとつの参考資料となればと思う。

* 調査者は関西調査は永田高志氏にお願いし九州調査は陣内が担当した。永田氏にはこの調査に関し、いろいろご協力頂いた。記して感謝申し上げる。

参 考 文 献

- 飯豊毅一, 日野資純, 佐藤亮一(編) 1982『講座方言学 近畿地方の方言』国書刊行会
- 井上 史雄 1977「関西弁と東京弁」『伝統と現代』45 伝統と現代社
- (編) 1983『〈新方言〉と〈言葉の乱れ〉に関する社会言語学的研究』科研費報告書
- 加藤 正信 1983「東京における年齢別音声調査」井上史雄(編) 1983 所収
国立国語研究所 1966『日本言語地図』1 大蔵省印刷局
- 永田 高志 1987「東京におけるガ行鼻濁音の消失」『言語生活』430 筑摩書房
- 水谷 修 1987「地方で出現するガ行鼻音」『言語生活』429 筑摩書房
- 日比谷潤子 1990「言語変化研究の新展開1」『日本語学』9-3 明治書院
- NHK 1980「現代人の話しことば」『NHK 文研月報』30-2 日本放送協会
- Osgood, Charles 1957 *The Measurement of Meaning*, University of Illinois Press: Urbana, Chicaso, London.
- Trudgill, P. 1974 *Sociolinguistics*, Penguin Books Ltd.

[付表] 調査表

1. 「それがいい」や、「けが」などの下線を引いた部分の発音に関して、「カ°」と「ガ」のイメージを5段階で答えて下さい。(SD法)
但し、「カ°」は赤色、「ガ」は黒色をお願いします。

	トテモ	ヤヤ	DK	ヤヤ	トテモ	
1. やさしい	•	•	•	•	•	きびしい
2. 柔らかい	•	•	•	•	•	硬い
3. 丸い	•	•	•	•	•	四角い
4. 長い	•	•	•	•	•	短い
5. 曖昧	•	•	•	•	•	明瞭
6. 上品	•	•	•	•	•	下品
7. きれい	•	•	•	•	•	きたない
8. 丁寧	•	•	•	•	•	粗野
9. 教養のある	•	•	•	•	•	教養のない
10. 正しい	•	•	•	•	•	誤り
11. 女らしい	•	•	•	•	•	男らしい
12. 深みがある	•	•	•	•	•	深みがない
13. 味がある	•	•	•	•	•	味がない
14. 使いたい	•	•	•	•	•	使いたくない
15. 好き	•	•	•	•	•	嫌い
16. 共通語的	•	•	•	•	•	方言的

2. 「カ°」の存在を意識したのはいつ頃ですか _____
 3. 現在「カ°」と「ガ」の聞き分けはできると思えますか _____
 4. その他、「カ°」に関する印象, 経験, 意見などあればお書き下さい

.....

年齢 _____ 性別 _____

これまでの居住経験 (例) 広島市 $\xrightarrow{6才}$ 札幌市 $\xrightarrow{18才}$ 福岡市

.....

Images of Japanese pre-vocalic [ŋ] in Regional Areas :

A Questionnaire Survey in the Kansai and the Kyushu Areas

Masataka Jinnouchi

This article reports on images of Japanese velar consonants [ŋ] and [g] in pre-vocalic position in two dialect areas, the Kansai and the Kyushu, where these appear in free variation. (In standard Japanese, these are conditioned variants of the same phoneme.) 50 university students in each area were asked to evaluate these two sounds in terms of 16 items by the SD (semantic differential) method.

It was revealed that although similar responses were generally obtained with regard both to region and to sex, Kyushu females regard [ŋ] as much more polite, correct, educated and feminine than [g]. This result seems to be an explanation of my observation in the Kyushu area that [ŋ] is used much more by female than by male and in formal situations than in informal ones.